

Structure Kansai No 14 '86.6

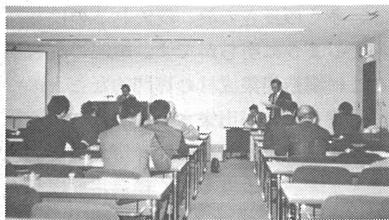
第5回関西支部総会開催

第5回構造家懇談会関西支部総会が開催されました。

●支部総会

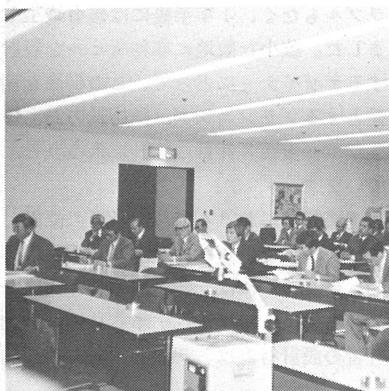
日 時 昭和61年3月28日(金)
13:00~13:45

会 場 建設交流会館 603号室
出席者 正会員:27名 委任状:60通
司 会 板垣勝善氏
議 長 進藤汎海氏
書 記 宇藤功氏
議 事 支部長挨拶につづき昭和60年度事業活動報告、61年度事業



久徳敏治 関西支部長挨拶

構造家懇談会も、本年で5周年を迎えました。また、関西支部も5年目に入り、その構成メンバーも200人に近づき、その基礎がためができたと確信しています。本年は法人化、士法改正などへの対応と重要な案件が山積していますが、何分にも地道な会員活動、会員に納得していくたゞく事業の企画、実行を旨とし、本会に帰属することの誇りと自信のもてる会に仕立てあげる、実りある支部に生育せたく希願しております。何とぞ皆様方のご支援とご協力を願っています。



計画並びに支部予算審議等が行われ、昭和60年度J S C A 関西賞の表彰式があり、窪田育弘 濑川輝夫 日下部一一の各氏が受賞されました。その後引き続いて横尾先生から、第39回I A S S国際会議の大坂開催についての御紹介と協力要請がありました。

●講演会「メキシコ地震を考える」
——被害の分析と検討——
基礎及び地盤 大場新太郎先生



60年度J S C F 関西構造家賞について
能勢善樹

選考委員会(内田直樹、後藤吉康、長田正雄、林保、松谷輝雄)で審議の結果、60年度表彰は窪田育弘君(ワールド構造技術研究所)と瀬川輝夫君及び日下部一一君(竹中工務店設計部)に決しました。窪田君は奈良在住の構造家として、木構造特に集成材の構造設計の分野を開拓されて来た事に対し、又、瀬川、日下部両君は都心部での中小規模ビルに有効な構法として、重層カルバートのアイデアを実現化し、今後この種の構造法の先駆的役割を果されたことに対し、贈られたものです。

上部構造の設計 南宏一先生
多賀謙三氏

司会 真塚事業委員長

●懇親会

総会、講演会終了後同館702号室に於いて、川村佳則氏の司会により懇親会が開かれ、正会員31名、賛助会員14名、合計45名の出席会員により、なごやかなひとときを過ごしました。



●講演会

引き続き真塚達夫氏の司会により、講演会「メキシコ地震を考える」が開かれた。現地を調査された大場新太郎大阪工大助教授、南宏一大阪工大助教授、日建設計多賀謙蔵氏の3名の講師が講演された。

大場先生は基礎および地盤についてメキシコ市特有の軟弱な盆地状の地形と地震波形の特異性(長周期、継続時間が長い)などが被害を大きくしたと説明された。南先生は上部構造の問題点について、メキシコの建物のつくられ方、各部のディテール、耐震規定を説明し、一見、建物は整形であるが柱が細く増築により構造的には複雑になりディテールも悪かった。最後に破壊のパターン別に被害例をスライドで紹介された。

多賀氏は耐震規定を補足説明、それによる簡単なシェルレーション応答解析を行い、10階建前後の建物が特に被害が大きかった理由を推論された。



第3回受賞によせて

(株)ワールド設計 ワールド構造技術研究所
代表取締役 窪田育弘

この度、田舎者
の私が名譽ある

JASCA関西構造家賞を頂き身にあまる光栄と感謝しています。これも、奈良県集成材工業協同組合(奈集協)梅田理事長のバイタリティーある前向きな構造用集成材の研究開発に参画を許して下さり、私の研究に理解と協力を惜しまず機会を与え続けて下さった御蔭であります。又、平田先生を始め多くの諸先生の導きに感謝するだいです。だれでも出来る事なのに、一歩早くその機会を得たこと、ただそのことだけなのに、受賞させていただいたことに非常に身がします。

木は、建築物の構造体を構成するものの内で、我々の身体と同じ有機物(細胞)で出来た唯一のものです。戦後は木材よりも鉄材を重用視され、木は片隅に追いやられて来ました。学校も鉄やコンクリートのような無機質な材料で建てられ、その中で育てられた子供達も次第に無機質な人間にされてきているような今であるような気がしてなりません。教育現場の荒廃に目にあまるものが見受けられます。子供達も、もっと、木で造られた建物の中で教育される必要がないでしょうか。元来、木はそれ自身の持つ割れ、節、

腐れ等の欠点により、燃えやすいことも伴い大規模な架構の構造体の建造物には不向きな材料がありました。そのため法的にも耐火上、構造上、限定されてまいりました。近年、構造用集成材の進歩により、建築物の構造体としても、安心して用いることが出来るようになりました。火災に対しても構造用集成材は、木の持つ欠点を除去し造られているため、その安全性は確かめられています。そのため、國も昭和59年12月17日に「建築基準法第38条」特別認定を行い、その範囲内で確認申請で処理出来るようになりました。このように國も、わざかながら門戸を開きました。しかし、一般の建築設計者が構造用集成材を使用した建築物を設計するには、その技術資料、参考書が見当たらない、いや、ほとんどないといっていいくらいかも知れません。私も資料を、計算方法を摸索しながら又、コンピュータープログラムを作りながら、ようやく自信のある大規模構造用集成材造の建物を設計することが出来るようになりました。やればやるほど深みがあり、構造と、意匠が一体として考えなければならぬおもしろさに、益々魅力を取り付かれています。これからも

構造用集成材の新しい使い方に研究、開発してまいりたいと思います。

今後、構造用集成材造の建物は非常に多くなっていくと思います。非常におもしろい将来性のある建材ではあります、湾曲構造用集成材の製造メーカー、構造用集成材をこなせる大工の少ないこと、日本の狭い道路事情からくる運搬の問題等、まだまだ解決しなければならないことも事実です。今後皆さんと共に勉強し我々の仕事の分野をふやさではありませんか。価格もここ数年メーカーの努力で数割も安価になりました。構造用集成材造の建物が、より多くなればさらに安価になり鉄骨造に変わらぬものとなるでしょう。価格が鉄骨並になれば、人間の持つ木造に対する愛着心、暖か味等、多くの良さの故、使われるのは目に見えるようになります。紙面の都合上ここに構造用集成材の専門のことについて書くことが出来ません。なにかの機会がありましたならば御詳解させていただきます。私よりも速く構造用集成材の発展に努力してこられた方々も多い中、私が、受賞の栄誉を得たことに、申し訳なく思うと同時に、これからも微力ながら努力する所存でございます。会員の皆様にこの賞のお礼を申し上げるとともに、尚、一層のご指導をお願い致します。



第3回受賞によせて

(株)竹中工務店
瀬川輝夫 日下部一

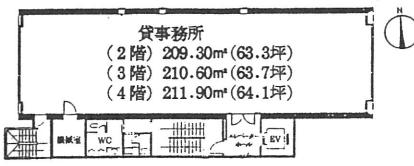
「かまわん、なんとかする。」

コンセプトが明解な仕事は、ことがトントン運ぶもので、ボックスを10個程積み重ね、サイドをリブで補剛した標準階高3.15mの大きな事務所ビルは大きなトラブルもなく、1年半後には無事竣工しました。狭小な敷地に事務所ビルを設計するデザイナーにとって、この構法を前提とするプランニングは結構魅力があるようで、現在3件目の設計に入ろうとしています。

建築設計における構造設計者の位置付けを表現する色々な比喩(縁の下の力持ち、伴奏者)には、若干明るさに欠ける面が多いように思われます。私達構造設計者の設計行為は、デザイナーの感性的

「こんなことができないですかねー。」オイル紙を片手にした中堅デザイナーから相談を受けたのが、今度受賞の対象となった「重層カルバート構法」と私達との出合いでした。デザイナーにも色々と個性がありますが、柱に対しての態度は概して冷たく、柱はその存在を嫌われる傾向があります。オイル紙に描かれた平面図は細長い平面を持った事務所で、柱ではなく長辺方向両サイドの壁体が太く長く事務スペースを区画し、その一方の壁体外面にそってサイドコアが配置された、単純明解なものでした。

世界イメージを、悟性、理性的世界から裏付けてやる行為ともいえるものと考えます。つまり、建築における（比較的）悟性、理性の人間が設計者であるともいえるわけです。当然のことながら私達構造設計者は、建築知識の悟性、理性に関する自己能力を高めなければならないわけですが、それと同程度に大切なのはデ



2～4階平面図

ザイナーの感性を理解すること、「仲の良い友達」になることではないかと考えます。構造技術にまだまだ未熟な私達が、「当たりまえの与条件を処理しただけ」の「重層カルバート構法」で受賞の栄に浴したことには、面映さを禁じえないわけですが、「デザイナーと仲良くやりながら良い建築を作りなさい。」という、先輩諸兄の励まし、鞭撻として受けとめ、一層努力していきたいと考えて居ります。有難うございました。

本構法の耐震設計に際して留意した点を併記します。

◎長手（壁面）方向は、開口部境界ば

りの強度、じん性確保に留意する。特に当該方向に関しては短周期構造物となるため、1次設計レベルに対応するペースシェア係数の設定に注意する。

◎短手方向のボックスラーメン架構の崩壊型は、（床）はりの曲げ降伏先行型を原則とするが、はり両端にはハンチを設け、ヒンジ発生位置はハンチ始端となるようにする。

◎はり、柱の曲げじん性確保に留意し、せん断補強筋には閉鎖型（溶接）のものを用いる。

定例研究会

日時 昭和61年4月4日13:30～17:00

場所 建設交流会館 602号

参加者 会員47名、賛助会員9名

一般17名

資料 PCプレファブ分科会

60年度研究資料（A4 144頁）

司会 柏木良雄氏

主催者挨拶 真塚事業委員長

・第1部

「PRC構造設計チェックポイント」

大内山正英氏

PRC造の初心者に対してPRC造の特性とRC構造の比較を説明し、ついでPRC構法、部材の利用法を紹介して、最後にこの構造独特の設計上のチェックポイントを設計手順にしたがって詳細に解説されていた。

「PC・PRC構造設計資料シート」

田中利幸氏

これまでの会員各社が保有している資料を持ち寄って整理したPRC構造に関する資料を用途別、規模別、PC鋼材の使用部位別等の項目に分類して系統的に解説された。この資料はPC導入の大さや構造計画の分野にまで亘っており、実務に役立つ資料となっている。

「PC・PRC構造設計監理チェックポイント」 渡辺勲氏

PRC構造は部材の軽量化やSRC造などと比較して工程短縮を図れる等の説明の後、亀裂の少ない建物が出来る一方振動障害等が発生し易いとの短所も紹介され、更に施工監理の仕方もPS導入力のレベルによって異なる事を具体的に解

“PRC構造の特性とコスト”

説された。設計段階に於ける施工に対する配慮が重要である事を力説された。

・第2部 パネルディスカッション
「PRC構造の特性とコスト」

パネラー 鈴木計夫 大阪大学教授

須賀好富 近畿大学助教授

PC部会 花島晃氏、土居健二氏

足立直行氏、徳永雄一郎氏

司会 松谷輝雄氏

〔鈴木教授〕我が国では今年1月、PRC造の設計指針が刊行されたが、設計指針としては1968年にチューリーマンを中心としたスイス規準が世界的には最初であること、この規準を参考にして1970年にCEBの指針が作られたことを述べられた。ヨーロッパではPRC造が特別扱いされておらず、大学などで使うレオナルドの教科書でもPRC造とRC造を一体として取り扱っており、日本でも早く区別のないような形になることが望まれると強調された。そして今後のPRC造の指向として、復元性の良くなること、ひびわれ防止への積極的な取り組み、RC造の部材に補助的に使用、など特性を生かした使い方を強調された。

〔須賀助教授〕実際に建設されたPC造の建物をコンクリート工事、鉄筋工事、PC工事、鉄骨工事の工事別単価比をパラメーターとして分析しコスト比較した結果を述べられた。その結果、PC造はSRC造より安価なデータが得られたが、一方、PRC構造では、プレストレスの導入量が少なければならないほど安価になる傾向も判り、RC造で設計出来る範囲

PCプレファブ分科会



ではRC造が安いと説明された。

〔花島氏〕氏自身が、ある工場の構造設計をするに当って、RC造、PRC造、SRC造のコスト比較をされた実績について詳しいデータを示しながら夫々の構造のコストスタディの内容を紹介された。大スパンが要求されたこともあって、RC造では柱スパンが小さくせざるを得ず、実設計ではSRC造よりメリットがあるとしてPRC造を採用するに至った経緯を実務家の立場で紹介された。

〔土居氏〕フレンジャー工法を使って、同じプレストレスの導入量でも採用するケーブルの径と本数の組合せでコストに変化が出ること、建物の平面形状と階数規模によってもコストに差が生じる事を述べて、十分な検討が大切と説明された。

〔足立氏〕各PC工法で共通して定着具のコストに占める割り合いが大きいこと。各工法を夫々、鋼材長に相当する定着具の割り合いをデータにもとづいて詳しく紹介された。

以上

討議については紙面の都合で割愛させていただきます。

（文責）PC・プレファブ部会 松谷

技術委員会報告

コンピュータ分科会

テーマ コンピュータ利用について

開催日 昭和60年9月25日

出席者 青柳 司(主査)、魚木晴夫

鈴木厚雄、高橋俊二、辻 英一
長井国雄、増田広見、和田 勉
斎藤幸雄

「コンピュータ導入によって構造設計の業務内容、作業内容等がどのように変化したか」

● 一貫プログラム導入時と、それ以前の個々のプログラム導入時の2段階で大きな変化がある。

● 東京-大阪間は新幹線でも徒歩でも移動できるが、その内容には大きな違いがある。これはまさにコンピュータ導入の有無にも対比できるのではないか。

● コンピュータばかり使用していると、その途中経過の誤りを見きわめることができず受けとめる傾向にある。

● そろばんや計算尺を使うと数字を実感としてとられられたが、コンピュータ出力による数字では実感に欠ける。

● 手計算の頃は架構のモデル化をじっくり考えた。したがって、結果と仮定の因果関係がよくわかったが、コンピュータを使った場合は結果の判断ができなくなっている。

● 一貫プログラムのない時は、途中経過をじっくり検討したものだ。

● 一貫プログラムはたとえ検定形式であっても、断面が足りない場合、鉄筋を徐々に増やす等、アウトプットだけで判断する安易な使い方をしているようだ。

● コンピュータは業務内容を変化させただけでなく人間の能力も変化させていく。マトリクス法等言葉は知っていても、実感としてわかっていないと思う。

● 昔は構造家=計算家だったし特殊な構造解析はほとんどできなかったが、今は解析が容易になって結構な事である。

● スパンの変更にも簡単に対応できる反面、意匠側から安易な変更を要求されることが多くなっている。

「新耐震設計法施行以前と以後でコンピュータ利用がどのように変化したか、ま

た新耐震に関連してどのような利用がなされているか」

● 新耐震設計法施行と一貫プログラムの普及はほとんど同時ではないか。これは建築構造の歴史の不連続点と言えるのではないか。

● 新耐震設計法が施行されたから、一貫プログラムを使うようになったのではないか。

● それは新耐震に手間がかかるから使うのか、新耐震がよくわからないから使うのか、両者ともあると思う。

● 新耐震により、仕事件数は増えているのに、仕事量・計算量は確実に増大している。計算量は倍近くになった。設計時間が増えても質は低下しているようだ。

● 行政側でも計算書の量が増加して困ったいるようだ。

● 今は設計にコンピュータを使っていのではなく、役所に提出する書類を造るのに使っているのが現実である。

● コンピュータによる計算をいくら経験しても、プログラムの特性がわかるにすぎない。これは建物の特性でも自然現象でもない。

● コンピュータがないと設計できない人がいると思われる。確かにコンピュータは設計に必要な道具であるが、コンピュータが設計をするものではない。

● 一般の解析分野では、次々に正しいプログラムで解析し、コンピュータを使いこなすが、建築構造の分野では単に事務処理の道具として使っているようだ。

● コンピュータによりルーチンワークの時間を短縮し、余った時間を設計に使うべきであるが、現実にはデータ修正などに時間を費やし、人間がコンピュータに使われている。

● 手計算に慣れた人からは、コンピュータ利用に対して批判が多い。コンピュータに頼りきるのではなく、うまく使いこなす姿勢こそが必要である。

「今後新たにプログラム開発する場合の問題点について」

● どのようなプログラムを自社開発すべきか?

● 膜構造のような新しい構造に関するもの等で、設計上不可欠とされるものである。

● 使用頻度の高いプログラムは自社で作るべきで、頻度の少ないものは買うべきである。

● 最近はプログラムを開発できる能力を持った人材が少なくなっているので新しいプログラムは開発しにくい。

● プログラムを開発するには企業体力が必要で、大手の会社にしかできなくなっている。

● 企業にとって宣伝効果のあるテーマのときは開発に力を入れるだろう。

● プログラム開発には、作る側だけでなく、使う側の思想を入れる必要があるので、作る側と使う側の両方を経験することが大切である。

● プログラム開発は趣味に近い。買ったプログラムには改造できないものがあり、致命的な欠点となることもある。

● 会社が大組織の場合でもプログラムの改良はしにくくなっている。

「コンピュータ時代の構造設計者の教育はいかにすればよいか」

● 構造設計者はコンピュータのことを知らないで、純粋に構造設計だけすればよいという考え方もある。

● コンピュータそのもの他に、出入力データと実際の建物の関連を知ることが大切で、現場に行くのも1つの方法である。

● 実際の力の流れが身につかないまま、プログラムを使用するケースが多い。

● プログラムの内容がだんだんブラックボックス化し、プログラムが常に正しいという認識のもとに使用する傾向にあるが、常に力学の基本を身につけておくことが必要である。

● 今はコンピュータを道具として使いこなして、そこから感覚を身につけるケースがあつてもいいのではないか。

● モデル化を正しく行うことが、構造設計者に求められることである。

● 構造設計とは何かという哲学をやることこそが、構造設計者の学ぶべきことである。

(文責 斎藤)

●支部の動き

- ・3/5 総務委員会—総会運営について
- ・3/7 理事会—60年度事業報告および決算案、61年度事業計画および予算案の承認、総会運営について
- ・3/13 広報委員会
- ・技術委員会の活動

鉄骨—2/20

R C—3/6

基礎—2/17、3/31

コンピューター—1/28、3/25

・支部総会

- 3/28 於建設交流館 603、702号
13:00~13:45 総会 出席33名
14:00~14:15 第39回 IASS 国際会議について
14:25~17:00 メキシコ地震を考える。出席43名
17:30~19:30 懇親会 出席45名

・定例研究会

- 4/4 13:30~17:00 於建設交流館
司会 柏木良雄氏 出席73名

1. PRC構造チェックポイント
大内山正英氏

2. PRC構造設計資料シート
田中利幸氏

3. PRC構造設計管理チェックポイント
渡辺 勘氏

4. パネルディスカッション
「PRC構造のコスト」司会 松谷輝雄
徳永雄一郎両氏

パネラー

PRC構造について

鈴木計夫 大阪大教授

PRC構造全般およびコストスタディ
須賀好富 近畿大助教授
他構造との比較によるコストスタディ
花島 晃氏

定着具とコスト

土居健二氏

定着具からのコストスタディ

足立直行氏

ディスカッション 参加者全員

- ・5/21 ゴルフ同好会 於伏尾ゴルフクラブ



技術委員会の活動状況

関西支部技術委員会の各分科会の活動状況は分科会主査の報告の通りで、若干の差はありますが、だいたい活発に運営されています。

最近入会の方々のための御通知を申しあげます。各分科会は会員が自由に参加できるように運営しておりますので、事務局に問合せれば、開催の日時・場所がわかるようになっています。進んで御参加下さい。

(青柳 司)

鉄骨分科会

内田直樹

60年度はStructure No.15で特集された座談会「建築鉄骨の動向」を担当し他支部の会員にも参加をお願いして交流を深めることができました。内部の勉強会としては塗装、ブラックスタッフ、後打ちアンカー等のテーマで専門家を招いて基礎的な知識を身につけることに努めました。また鉄建協や全構連とも前年に引き続き技術交流を継続し、工場認定制度のヒヤリングをしたり講習会や試験にも協力しました。

R C分科会

須賀好富

昭和60年度の分科会は、
60-10-1, 60-1-5, 61-3-6
の3回開かれ、フラッシュバット溶接の帶筋や高強度フープ（ウルボン）について開発者の意見を聞いた。これらは今後の設計に参考になるものである。

61年度はさらに新工法・新材料を洗い出し、研究を進めて行くつもりである。さらにいくつかまとまれば情報として会員に流し研究会等をもちたいと考えている。

P Cプレファブ分科会

松谷輝雄

分科会活動も4年目になります。2ヶ月に1回のペースで例会を開催しています。各委員からP C又はP R Cの設計例を紹介してそのデータを設計資料として「PRC造の構造設計チェックポイント」をまとめました。今年の4月には、一昨年にまとめた「設計監理チェックポイント」と合わせて定例研究会の場を持ちました。今年も新テーマを定め例会を開催します。一般会員の方の参加を期待します。

基礎分科会

加藤裕造

昨年8月に基礎構造に関するアンケートを行ないました。会員諸氏が経験された問題点を中心に分析し、実務運営に役立つ参考資料とするのが目的です。集計結果の一部は中間報告（本機関誌No.13）しました。現在、設問Ⅲ、問題点の具体的な事例、を中心に分科会メンバーが分担して内容を検討中です。62年3月には支部研究会を開催し、検討結果を報告する予定です。

コンピュータ分科会

青柳 司

61年度は、最近のC A Dの利用状況について、具体的な紹介と今後の動向を検討しようと思っています。また、人工頭脳（A I）についての勉強を有志の方にしていただき、秋にはミニ講演会でも開こうかと考えています。特にA Iについては、これから分野であり、皆んな未だ良く理解できていないので、大変とは思いますが、少しでも足がかりが出来ればと思っております。

耐震分科会

金沢正明

耐震分科会は、昭和59年6月に第6回の分科会を開催して以来、適当なテーマが見付からない、またその間の主査の交替やらで、休会の状態が続いております。最近、耐震設計からの観点を重点とし、一般に行われている超高層建築物の耐震設計手法の動向を技術資料として纏めてはどうか、との案も寄せられており、近々活動を再開したいと思っております。会員の皆さんも、適当なテーマが有りましたら、事務局宛にお寄せ戴ければ、幸甚に存じます。

前川陽一氏 御逝去

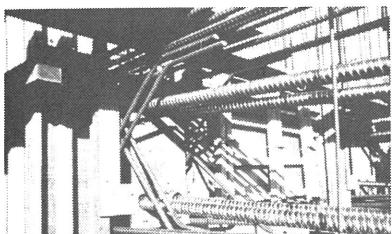
構造家懇談会関西支部理事であった 村野森建築事務所 前川陽一氏は、かねてから病気療養中でしたが、3月31日肺炎を併発し逝去され、告別式は、4月1日13時より尼崎市広徳寺にてとり行われました。

ここに慎しんで哀悼の意を表すと共に、御冥福を心よりお祈り申し上げます。

「大阪産業大学」PC構造見学会に参加して

(株)大林組設計部 八木 貞樹

寒波の和らいだ冬の一日、大阪産業大学の現場見学会に参加した。国道170号線を車で走ると阪奈道路へのアプローチ付近に、周囲を圧倒するボリュームを目指す建設現場が目に飛び込んでくる。当建物は、地下1階、地上10階の大学の本館である。高層部はトリプルコアを有する整形なプランで、建物の長手方向に、各々のコア間をスパン21.3mのプレストレス梁で繋いでいる。各コア部は、平面形でH形又はL形の耐震壁を配している。PC鋼材はフレッシュのマルチワイヤで、12φ7と12φ8の二種類を、荷重により使い分けている。設計JVの高橋上田設計事務所及び施工JVの大林組大木建設の方々の案内で現場を見学したが、PC鋼材の定着端を配筋が密な柱より外部コアの大梁側に避けたり、その為の打継部の剪断補強用X形配筋や定着端付近のスラブのひびわれ防止用の斜め筋当、設計上のきめの細かい配慮がなされていた。施工上も、配筋詳細図で鉄筋とPC鋼材の干渉等、詳細に検討したと伺ったが、



難しそうな部分も上手に配筋されていた。脱型の済んだ下階を見たが、梁せい1.2mのPC梁が約20m角の無柱空間を支え、広々とした開放感と共に、快い緊張感を与えてくれる。見学後、軸体の1サイクル分のスライドによる説明があったが、外部足場を外壁プレキャスト板取り付けの為、跳出し足場として、順次上階へ転用する等の工夫がうかがえた。継ぎに、大阪大学の鈴木先生から、PC構造の要点や、学会から出版される所謂PRC指針の概要説明があった。PC構造にかける鈴木先生の情熱が言葉の端々に感じられ、有意義なお話であった。最後に、質疑応答では設計から施工に至る広範囲な質疑があったが、私にとって色々考えさせられたのは構造計画に関してであった。

下階に大学本部や教室群、上階に主として研究室と複合的機能を有するこの建物に対し、耐震性や用途上の機能を考えて、下層SRC造、上階PC造になったと思われる。コア部以外を無柱空間としてプランニングの自由度や将来の間仕切の可変性等機能の充実と共に、コンクリート構造のもつ質感を、パースから推察して外観の重厚なデザインとマッチさせることで、この建物のアイデンティティを高めることに成功していると思われる。構造計画上、本計画が最良か否かは第三者には分からぬ種々の条件が複雑にからむ為、判断が難しいが、多くの解決手段の一つとして与えた本構造は私には大変参考になった。

井出 晃二

(勤) 竹中工務店大阪本店

設計部構造課

(趣) 魚釣り



井本 明男

(勤) 井本建築設計室

(趣) 野山散策、農作業



日用大工

昨年8月、周囲の事情もあり、急に名古屋から和歌山の田舎に戻った。20数年の都会での修業は少々長かった気もするが、久々の田舎生活は新鮮だ。構造設計では、よりシンプルに、力の流れをよりスムーズに、基本に忠実にと心掛けているが、そのモデル化の整合性には唯祈るのみです。

田中 理夫

(勤) 地建工業㈱

(趣) 山登り



坪内 幸一

(勤) 竹中工務店大阪本店

設計部構造課



(趣) テニス

私達に今与えられる情報は建築分野だけに限っても相当なものがある。その中の玉を探し出し、みがき、空間を生かすための骨組を造り出すことが構造設計に携わる者の喜びだろうと考えるこの頃です。



編集雑感

早いもので支部会報も創刊以来14号目を迎えました。広報委員会は限られた時間での誌面の企画充実に努力いたしておりますが、今回約1ヶ月発行時期が遅延しました事をお詫び致します。

